０７／０９／０２　　礼拝メッセージ　　ポール・フェリックス師

主　　題：イエスは我がいのち
聖書箇所：ピリピ人への手紙　１章２１節

近藤牧師よりフェリックス・ファミリーの紹介＝今、大阪長居競技場で行なわれている世界陸上競技大会でアリソン・フェリックスが２００ｍ走で金メダルを取りました。先週金曜日の夜、ホテルで話をしました。すごい記録だったようです。１９４７年以降、１位と２位の差があれだけ開いたのはこれまでになかったとのこと、トレーナーがアリソンにあなたが皆に話しますかと聞くと、私はいいと辞退しました。私たちは自慢できることがあると得意になって自慢したくなるものですが、彼女はそれをしないのです。そこでトレーナーが私たちに大きな記録だったことを話してくれたのです。それを見ていて、彼女は自分が金メダリストだということを誇ろうとしているのでなく、彼女にはそれ以上に大切なものがありそれを誇ろうとしている、そのような一人のクリスチャンであることを確信しました。それもご両親が神の知恵によってこの子どもたちを育てて来られたからです。ご長男のウェスもナイキと契約しているプロの選手であり、アリソンはアディダスと契約しているプロの選手ということで、このような形で神さまがご家族を用いられるということはすばらしいことです。今日のメッセンジャーのポール・フェリックス先生は私の神学校時代のクラスメートであり親しい友人です。一番難しいクラスがあってそれをパスしなければ卒業できないのですが、彼はいつも１００点だったと私は記憶しています。彼の心の思いは黒人の方々、アフロアメリカンと呼びますが、彼らのために働くこと、彼らをしっかり訓練してみことばを正しく伝える者たちを立て上げて行きたいということで、現在、マスターズ神学校の新約の教授として、神学校で後進の指導に当たっておられますが、それとともに、ロサンゼルスでロサンゼルス・バイブル・トレーニングスクールの学長としても働いておられます。大体２４０人位の生徒が集まっていると聞いています。私たちはそこでどのような働きがなされているのか知らないので、このメッセージの前にしばらくお話くだされば とお願いしました。フェリックスご夫妻のお父さんたちはどちらも牧師先生でお互いよく知っておられたようです。フェリックス先生のお父さんは１９６０年にもう召されたのですが、夫人のお父さんは９８歳の今もお元気で車を運転され、メッセージのご用もされておられるとのことです。そこからあの強靭な肉体が生まれたのかと思わされますが、アリソンの横に立つと本当にきゃしゃな体型ですが、それであれだけのパワーをもって走っていたわけです。そういうことで、特にいっしょに勉強した親しい友が来てくれて、みことばを開いてくれることは本当に感謝です。この講壇に歓迎してお招きします。

今回、日本に来た目的は娘が世界陸上で走るのを見るためでした。私にとって娘が毎日走る姿を見ることはすばらしい特権だと思っていましたが、近藤先生から日本にいるならぜひメッセージをしてくださいと頼まれたときに、どうしようかと考えました。けれども、神は私に近藤先生の招待にすぐにイエスと答えなかった愚かさを示されました。私はここに来て皆さんに神のみことばを伝えることをすばらしい特権だと今思っています。そして、この日本において皆さんのような主にある兄弟姉妹がいると知ることは本当にすばらしいと思っています。また、私たちのすばらしい神をともに崇めることができることは何という大きな特権でしょう。近藤先生は私たちにすばらしいもてなしをしてくださいました。特に私の妻、息子にすばらしい日本を見せてくださり歓迎を受けています。私の息子、娘のためにどうぞお祈りください。神は彼らにすばらしい能力を与えてくださって、陸上競技の中で力を発揮するようにしてくださいました。しかし、私の妻と私にとっての最も大きな彼らに対する願いは、神の前に彼らが正しく歩むことです。使徒であるあるヨハネはその第三の手紙の中で、霊的な子どもたちが正しい霊的な道を歩んで行くこと以上にすばらしい喜びはないと語っています（４節「**私の子どもたちが真理に歩んでいることを聞くことほど、私にとって大きな喜びはありません。**」）。確かに、私の娘は金メダルを取りましたが、私たちにとって何よりもすばらしい知らせは彼女が神の前に真実の中にしっかり立って歩んで行くことです。

どうぞ、ロサンゼルスにあるバイブル・トレーニングスクールのためにお祈りください。この学校はマッギー先生というすでに召されたすばらしい先生によって始められた学校です。黒人の牧師が自分の民がみことばを伝えることができるようにと願って働きをされたところです。この学校は１９６２年に開校されました。私はこの学校の生徒として１９７４年に入学しました。そして、神はこの学校を通して私の人生を大きく変えてくださったのです。神はみことばを通して神ご自身をより明らかに示してくださいました。先週、この秋の学期が始まりました。２４０人の生徒たちが今そこに集まっています。

皆さんのような人たちです。肌の色が違うだけですが…。けれども、彼らはこの学校に来てもっと神のことを知ろうと努めています。彼らはロサンゼルスにあるいろいろな教会から来て学びをしているのです。どうぞ、彼らが神のみことばをしっかり学んで神のみこころに従って生きて行くことができるようにお祈りください。

どうぞ、聖書を開いてくださってピリピ人への手紙１章をご覧ください。１８節から読みます。

「:18 すると、どういうことになりますか。つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでいます。そうです、今からも喜ぶことでしょう。:19 というわけは、あなたがたの祈りとイエス・キリストの御霊の助けによって、このことが私の救いとなることを私は知っているからです。:20 それは、私がどういうばあいにも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める私の切なる願いと望みにかなっているのです。:21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」

お祈りします。「愛する父なる神さま、あなたがここで語られるメッセージ、その教えを祝してくださるように。そして、私たちの心をあなたが天から整えてくださるように。私たちが単に聞くだけの者ではなく、みことばを行なう者となるようにしてください。このことをイエス・キリストの御名によって、主の栄光のためにお祈りいたします。アーメン」

人間の歴史の中で、常に人々は人生の意味、生きて行くことの意味について葛藤しています。若い人も年老いた人も、なぜ自分は存在するのかという疑問を持ち続けて来ました。彼らは皆、この人生とはいったい何なのかという質問をし続けました。どうして私はここにいるのだろう？このいのちの意味は何なのだろう？残念ながら、この世にはその答えを見つけることなく死んで行った人たちがたくさんいます。また、さらに悲しいことに、自分ではその答えを見つけたと考えたとしても、実はその答えが間違っていたことを気付かされつつ死んで行った人たちもたくさんいます。彼らはときに人生は自分自身のためのものであったとか、また、他の人のためのものであったとか、他のもののためであったりとか、そのように思いながら生きてきました。けれども、何よりも最も大きな悲劇は、その答えを知っているはずのクリスチャンがその意味をしっかり理解せずに、なぜ神がここに私たちを置いてくださっているのかを知らないで生きていることがあるということです。何年も前にアウグストという一人の祭司がいました。彼はこのように言いました。「神さま、あなたは私たちをあなたのためにお造りになりました。私たちのたましいはあなたに安息を見出すまで決して安らぐことはありません。」と。アウグストは人生が何なのかをよく分かっていたのです。彼は神が私たちを造ってくださり、それが私たちの存在理由であり、私たちがそのことを見出すまで安らぎがないことを分かっていたのです。

アウグストがこのことばを語るもっと前に、ある一人の人物が同じことをローマの牢獄の中で書き記しました。その人物が書いたことばは**「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」**でした。このことばは私たちに人生がいったい何なのかを明確に教えてくれるものです。私たちがなぜこの世に存在し、なぜ私たちにいのちが与えられているのかを正しく理解しようと思うなら、パウロがここで語っていることばを理解しなければいけません。私たちはこのピリピ１：２１のみことばを見るとき、常に「キリストこそが私のいのちである」ということを覚えていただきたいのです。このことばの中に出てくる単語の数は非常に少ないものです。パウロはここで九つの単語しか使っていません。確かに、わずかな単語ですが内容は非常に重要です。このことばは死のうちにあるいのちについて語っています。また、ここに出てくることばは神学的にも価値の大きなものです。なぜなら、ここで言われていることを通してパウロは「キリストこそが神である」ことを私たちに教えているからです。パウロはユダヤ人としてずっと生きて来たわけで、その中で彼は神が唯一であることがよく分かっていました。そして、人としての責任はこの唯一の神を自らの心すべて、たましいすべて、肉体すべて、思いすべて、力すべてをもって神を愛することです。けれども、この節でパウロは神の名を口にしないで、その代わりに主イエス・キリストの名を出すのです。そして、彼はこの主イエス・キリストこそが私たちの人生の中心でなければならないことを教えます。そして、そのことを告白することによって、直接的ではなくてもこのイエス・キリストこそが神であることを私たちに教えるのです。このみことばは私たちに大きな感銘を与えるものです。教会の歴史を通してパウロが語ったこの１：２１のことばは、人々の人生に大きなインパクトを与えました。このことばによって多くの人たちの人生が変えられて行ったのです。ですから私の心からの祈りは、私たちがこのみことばを見てその力によって私たちの人生も同じように変えられることです。パウロはこの節の中で、パウロの人生哲学を教えてくれます。そして同時に、死に対する彼の見解を示してくれます。

１．パウロの人生哲学

これらのことばは天から突然現われてきたのではなく、この文脈の中にしっかり収められています。パウロはこの文脈の中で、なぜ、パウロがキリストが自分の人生の中で偉大なものとして現われてほし

いのかということを教えているのです。２０節の後半で**「生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを」**願っています。パウロのこの願いの理由というものこそが**「生きることはキリスト」**であり**、「死ぬことも」**彼にとって**「また益」**であったからなのです。これらのことばはまさにパウロが人生をどのように生きて行くのかという、その説明だったのです。パウロはここで**「私にとって」**とこのことばを非常に強調しています。彼はテモテの代わりにこのことを言っているのではありません。１：１に彼の名前が出て来ます。彼はピリピの教会の人たちの代わりにこのことを言っているのではありません。このピリピ人への手紙に出て来る何人もの名前のクリスチャンたちを代表して言っているわけでもありません。パウロは個人的に自分の証をしているのです。パウロはまるで旧約聖書のヨシュアのようです。ヨシュア２４：１５でヨシュアはイスラエルの民に向かってこう言います。**「…私と私の家とは、主に仕える。」**と。そして、パウロはここで**「私にとっては、生きることはキリスト」**であると言います。「生きる」「いのち」「人生」というのは人にとっていろいろな意味をもっています。もし、皆さんがだれかにその人のもっている人生観、いのちの意味が何かを尋ねるとするなら、この質問をするといいのではないかと思います。「あなたにとって生きるとは何なのか？」、その答えが「私にとって生きるとは〇〇です」と、そのブランクにある人は性行為をすることですと言うかもしれません。ある人はスポーツです、ある人は仕事です、また、他の人は教育ですと言うかもしれません。ある人たちはもしかして良いことを言うかもしれません。私にとって生きるとは教会ですとか、神のための働きですと…。けれども、もし私たちがこの質問をパウロにするなら、彼は**「私にとっては、生きることはキリスト」**ですと答えます。パウロは人生に唯一の焦点をもっていました。その焦点こそがまさにイエス・キリストだったのです。

けれども、パウロがここで**「私にとっては、生きることはキリスト」**ですと言ったその意味は、キリストが彼の人生の中心であり、また、そのすべてであるということです。彼の人生を要約すれば、また、すべてをそこに包み込んでしまうなら、キリストしかいないと言うのです。キリストがいなければ彼は存在することもできないと言います。もし、キリストが彼の人生の中にいなければ、彼の人生はまったく意味のないものだと言うのです。パウロはこれがなくても生きて行けるしあれがなくても生きて行けるだろうけれど、キリストがなければ私は生きて行くことができないと言います。ある人たちは麻薬などの薬がなければ生きて行けないと言います。ある人たちはアルコールに同じような思いをもつでしょう。ある意味では、パウロはキリストに中毒の状態だった、キリストがなければ生きて行けなかったのです。つまり、彼にとって毎日の生活にキリストが必要だと言うのです。キリストがいなければ私は死んだ者であるとパウロは言います。私たちの人生はもしキリストがいなければ今と違うものでしょうか？もし、明日の朝起きたときに、キリストが皆さんの人生にいなかったら、皆さんの人生は違うものになりますか？パウロならそれはもう生きて行くことができないのです。**「私にとっては、生きることはキリスト」**というのは、キリストが求めること、キリストの願うこと、それこそが私の求めることであり私の願うことであると言っているのです。パウロが行なったことすべて、願ったことすべては常にキリストと関係があるものでした。

別の角度からこのことを考えるなら、パウロは自分自身がキリストのしもべだと言います。それは主であるキリストが召したその通りのことを彼は為して行くということを告げているのです。彼の主人であるイエス・キリストがパウロにしてほしいと願っていること、それをパウロは喜んで行なっていったのです。キリストが行きなさいと願ったところに彼は行きました。主人であるキリストがこのように生きなさいと願ったその生き方をパウロは生きたいと願ったのです。彼の人生はイエス・キリストを中心とした生き方だったのです。けれども、これは毎日の生活にどのような影響をもっているのでしょう？

別の言い方をするなら、この節**「私にとっては、生きることはキリスト」**というのは、パウロの毎日の生活にどのような影響をもたらしていたのでしょう？この１：２１の文脈からその答えを見ることができます。もし、キリストが生きることのすべてであるとするなら、彼は人生の状況の奴隷にはならないということです。パウロがこの手紙を書いたとき、彼はローマの牢獄の中にいました。パウロが牢獄にいるということはもう福音が語られることはないとピリピ教会の人たちは考えたのです。ピリピ１：１２を見るとパウロはこのように言っています。**「さて、兄弟たち。私の身に起こったことが、かえって福音を前進させることになったのを知ってもらいたいと思います。」**と。パウロは確かに牢獄の中にいたのですが、その中にあっても福音を伝えることを止めなかったのです。なぜなら、キリストが彼のいのちだったからです。ある人たちはキリストを宣べ伝える働きを間違った理由でします。けれども、パウロにとってはキリストが自分の人生の中心であったゆえに、キリストを宣べ伝えることほど喜びをもたらすことはなかったのです。ですから、たとえ間違った理由、間違った方法でなされたとしても、キリストが宣べ伝えられることを喜びとしていたのです。１：１５を見ると**「人々の中にはねたみや争いをもってキリストを宣べ伝える者もいますが、善意をもってする者もいます。」**と言っています。そして、１８節には**「すると、**

どういうことになりますか。つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでいます。そうです、今からも喜ぶことでしょう。」とあります。もし、キリストが私たちの人生の中心にあるとするなら、私たちはキリストが宣べ伝えられることを何よりもの喜びとするのです。キリストが人生の中心であるとき、私たちはこのキリストをほめたたえようとします。他の人たちの目の中でキリストが偉大な方であるように見受けることができるようにと願うのです。１：２０で先ほども見たように**「それは、私がどういうばあいにも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める私の切なる願いと望みにかなっているのです。」**とパウロは願うのです。キリストが自分の人生の中心であるとき、その人はキリストに仕えることに献身しています。２２節を見ると**「しかし、もしこの肉体のいのちが続くとしたら、私の働きが豊かな実を結ぶことになるので、…」**と言います。また、キリストが人生の中心であるときには、そのキリストとともにいることを何よりも願います。２２節の後半からパウロは言います。**「…どちらを選んだらよいのか、私にはわかりません。:23 私は、その二つのものの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。」**と。そして、キリストが自分の人生の中心にあるときに、その人は自分が願っていること以上に、他の人の最善を願うようになるのです。パウロは何よりも天にあってキリストとともにいることを求めました。けれども、神が彼をこの地上において行くことを願い、また、彼の働きが他の人たちの徳を高めることになるなら、彼は喜んでそこにいると言うのです。パウロは他の人の最善を自分の最善よりも上に置いていたのです。パウロにとって**「生きることはキリスト」**でした。

ある歌の中にこのような詩があります。「イエスは私にとって世界すべてだ。私の人生、私の喜び、私のすべて。日々に渡って彼は私の力である。彼がいなければ私は倒れてしまう。私が悲しんでいるとき私は彼のもとに行く。なぜなら、私を喜ばせることができる方は彼以外にないから。私が悲しんでいるとき彼は私を喜ばせてくれる。彼こそ私の友だ。」。キリストはパウロの人生に意味を与え、目的を与えたのです。パウロが生きた人生はキリストが彼に命じたことをその通りに為して行く、まさにそうでした。これがパウロの人生哲学でした。**「生きることはキリスト」**であると。

２．パウロの死に対する見解

２１節の後半部分でパウロは彼自身の死に対する見解、見識というものを示しています。多くの人たちは死について話をすることを嫌います。彼らは「死」や「死ぬ」ということばの代わりに他のことばを使います。アメリカでは「死ぬ」ということばの代わりにあの人は「バケツを蹴った」という言い方をします。それにどんな意味があるのでしょう？それは「死」と全く関係のないことです。また、人は過ぎ去ってしまったとか、期限が切れたという言い方もします。なぜ、そのようなことばを使うのでしょう？それは人々が「死」ということばを使いたくないからです。しかし、皆さんがよく知っているように死は現実です。聖書が私たちにはっきり教えることは、人には一度死ぬことが定められ、その後さばきがあるということです。パウロは死について語ることを恐れてはいませんでした。パウロは確かに死ということをいくつかのことばを使って説明しています。その一つは「眠る」ということばです。なぜそのようなことばを使うのかと言うと、私たちが死んだとき私たちの肉体は眠りにつきますが、たましいは主のもとに行くからです。そして、いつの日か私たちの肉体はその眠りの状態から起こされて、私たちは復活してたましいといっしょになるのです。また、「死」を「旅立ち」と言います。明日の朝、私の妻と息子、私は飛行機に乗って日本から去って行きます。いつの日か私たちは必ずこの地上から去って行くときが来ます。私たちは天国へ飛んで行くのです。また、パウロはこの「死」を地上の神殿を倒すことであると言います。また、肉体から離れることであるとも言います。多くの人は死について話したくありません。けれども、パウロは**「死ぬこともまた益です。」**と言います。もし、皆さんが人々に向かって「死ぬこととは何ですか？」という質問をするなら、人々は間違いなく**「死ぬこともまた益です」**とは言わないでしょう。多くの人たちは死ぬことは悲劇だというでしょう。また、ある人たちはすべての終わりであると言うかもしれません。また、ある人たちは死ぬことは悲しみであるというでしょう。でも、パウロは死ぬことは益であると言います。なぜ、そのように言うのでしょう？その理由は間違っていません。ある人たちは死ぬことが益であるという理由は人生の苦しみや悲しみから解放されるからと言います。ある人たちはこの人生の様々な誘惑や試練から解放されるからと言います。また、ある人たちは私たちが様々な働きや苦役から解放されるからと言います。また、ある人たちは私たちがもう病に苦しむことがなくなるからと言います。けれども、これらの理由は死が益であるということを見出す間違った理由です。パウロが「益」だと言うのは、それが私たちにとって有益、有効なことであり、私たちのためになることだからです。パウロはこのことを、遺産を相続するとか投資してきたものの報いを受けるという形で考えています。そして、パウロが**「死ぬこともまた益です」**という一番の理由は、彼がイエス・キリストの臨在のもとに立つことができるということです。パウロはキリストを何よりも愛

していたゆえに、彼が最も願ったことはこのキリストと顔と顔を合わせて近い位置に立つことだったのです。パウロがこの地上にいたとき、キリストは彼にとって人生でした。けれども、彼が死んだとき彼が分かっていたことは、キリストとの交わりの中で何一つ妨げるものがなくなるということです。この**「死ぬこともまた益です」**ということを正しく理解する唯一の方法は、**「生きることはキリスト」**であることをはっきり知ることです。もし、皆さんが**「生きることはキリスト」**であるということをしっかり理解することがなければ、「死」というのは決して「益」となることはありません。もし、生きることが物質主義であるなら死んだときにすべてを失います。もし、生きることが皆さんの名声や権力であるなら、死んだときにすべてなくなります。けれども、もし**「生きることはキリスト」**であるとするなら、死んだときに皆さんはキリストの御許に引き寄せられて行くのです。

この「死が益である」という考えは革命的な考えです。多くの人たちは死を恐れます。多くの人たちは死について考えたくありません。けれども、パウロは死こそ私たちに何よりも良いものをもたらすと考えたのです。なぜなら、彼がその人生の中で何よりも求めていた方とともに存在することができるからです。パウロは死を面前にしてはっきり宣言することができたのです。**「死ぬこともまた益です」**と。このパウロのことばは私たちにＩコリント１５：５５のみことばを思い起こさせます。そこでパウロはこのように言います。**「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」**、そして、続けて言います。５７節**「しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」**と。４年ほど前に、私の８８歳になる母があと１年しか生きることができないと宣告されました。彼女は心臓の難しい手術を受けなければいけないということを告げられたのです。母は主イエス・キリストを信じるクリスチャンです。彼女は自分自身のすべての信頼をキリストのみに置きました。医者が母に対して、１年の間に間違いなく非常に大きな心臓の発作を起こすだろうと言われたとき、そのことは私に大きな動揺をもたらしました。４年経っても母はまだ生きていますが、いつの日か母が死に直面するという事実は私の前にあり続けます。もし、母が今日この瞬間に亡くなったとしても、その死は彼女にとって益であると私は知っています。なぜなら、母が１０代のときに仕え始めた彼女の主に、顔と顔を合わせて会うことができるからです。確かに、それは私にとって悲しみをもたらすことかもしれませんが、私が知っているのは母は大きな喜びに包まれるということです。なぜなら、死んだその瞬間に主の臨在へと引き上げられるからです。それはパウロが言うように、この地上に残り続けるよりもはるかにすばらしいことです。

パウロは私たちに彼の人生哲学を教えてくれています。パウロにとって人生はキリストだったのです。キリストこそが彼にとってのすべてだったのです。なぜなら、彼は人生のすべての瞬間瞬間をイエス・キリストのためだけに生きたからです。そのように生きたゆえに死というのは彼にとって益でしかないことに彼は気付いたのです。ですから、彼は私たちに向かって今日問いかけます。**「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」**と。

このメッセージを閉じるに当たって、今日、皆さんといっしょに歌った「キリストには変えられません」という歌の背景をお伝えしたいと思います。この歌の中で私たちはこの地上のあらゆる富、財産よりもキリストをもつことを望むと歌いました。この歌の歌詞に曲をつけたのはジョージ・ベバリー・シェイという人です。彼はビリー・グラハム先生とともに働きをした方です。ビリー・グラハム先生がクルセードをもつ度に、彼は必ずそこで特別賛美をしました。彼がまだ若かったとき、彼は大学を中退して彼には一つの選択が迫られていました。それは音楽業界の中で仕事をもつか、あるいは、神に仕えるのかというものでした。彼の母親はまだ曲がついていなかったこの曲の歌詞を紙に書いていました。ジョージ・ベバリー・シェイがある日、ピアノの前に座ったときにその書かれていた歌詞を見ました。そのことばを見たとき、彼はそれに曲をつけたのです。彼がビリー・グラハムのクルセードで歌ったとき、彼はこの曲を歌うことを何よりも好んでいました。なぜなら、そこにはこのように書かれているからです。「私は金や銀よりもキリストをもつことを願う。私は多くの財産を得るよりもキリストをもつことを願う。また、私は多くの家や土地をもつことよりもキリストをもつことを願う。私はキリストの釘に刺されたその手によって導かれることを何よりも願う。」と。なぜなら、このジョージ・ベバリー・シェイはキリストこそが私のいのちであることを分かっていたからです。ここにいる私たち一人ひとりも同じことを覚えて生きたいと心から願います。**「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。」**